

学会ニュース

目次

・ 第35回大会について	1
【エッセー】		
・ レノルズの描いた<高貴な野蛮人>	相澤照明 2
・ 『かこの本』の扉頁から考えたこと	佐藤茂樹 3
・ 事務局より	5

第35回大会について

来年度の第35回大会は2013年6月22日（土）、23日（日）の両日、一橋大学で開かれる予定です。開催校責任者は小関武史会員です。

共通論題は「18世紀の〈地下〉を掘る」（仮題）で、コーディネーターは寺田元一会員です。23日（日）を充てる予定です。

自由論題公募要領

第35回大会で発表を希望される会員は、1000字以内の発表要旨をつけて、2013年3月8日（金）までに学会事務局まで郵便かメールでお申し込みください。郵送の場合は要旨のプリントアウト原稿および電子ファイル（「ワード」形式で作成されたもの）の両方をお送りください。メールの場合は、要旨を添付ファイル（「ワード」形式）またはメール本文にコピーしてお送りください。

発表は1件につき50分、うち報告が40分、質疑応答が10分の予定ですが、申込者が多数の場合は、個々の発表の時間を短縮したり、あるいはこれまでの発表の有無、共通論題を含む諸分野のバランスなどを勘案して、幹事会で調整ないし選考させていただくこともありますので、この点はあらかじめご了承くださいませようお願い申し上げます。また、会場で配布されるコピー資料は原則としてご自分でご用意いただくことになっています。

詳細はプログラムが決定され次第、事務局から個々に連絡申し上げます。

レノルズの描いた〈高貴な野蛮人〉

相澤照明 (佐賀大学)

「イタリアにいるイギリス人は友人であり、中国にいるヨーロッパ人は友人である。恐らく月で人間に出会ったなら、彼は人間というだけで愛されるであろう。」(『人間本性論』1739) 学生時代に強く心に残ったデイヴィッド・ヒュームの言葉である。人間とはなんらかの関係性によって動かされる存在であることを看破した言葉として興味をそそられたばかりでなく、18世紀のイギリスにおいて、金星の太陽面横断への関心やハリー彗星の予言的中やグリニッジ天文台の創設に見られるように、天文学への関心が高まっていく時代に語られたものとして、「月で人間に出会ったなら」という言葉が強く印象に残ったのである。

この言葉を思い出すきっかけがあった。昨年、セベリア近くのコリア・デル・リオという小村を訪れたが、それはスペイン国王フェリペ3世並びにローマのパウルス5世に謁見した支倉常長の慶長遣欧使節が立ち寄った村である。キリシタン弾圧の知らせを聞き、日本に帰国せずにその地に留まったその末裔がハポンという姓で今なお多く生活しているという説でも知られている村である。グアダルキビール河畔の公園の片隅に支倉常長の像が立っており、近くに渡し舟が行き交うだけで、他に見るべきものはなにもない郊外の住宅地といった村であるが、ただ、川海老であろうか、バールのカウンターに揚げた海老がタパスとして大量にあったのが印象に残っている。17世紀に初めて日本人を見たこの村の人懐っこいスペイン人が和服や丁髷を物珍しげに眺めたであろう情景を思い浮かべながら、18世紀には一体どのような地域からヨーロッパを訪れた人がいたのか思い巡らした時、先のヒュームの言葉がふと心に蘇ったのである。

イギリス18世紀において、例えば、ホガースの絵の中の黒人についてのダビディーンによる研究もあるように、ホガースの絵には多くの黒人が登場するが、黒人を召使とするのが流行った時代の風俗画においてはそれも当然のことであろう。レノルズにも、《ターバンを巻いた若い黒人女性》の絵があるが、レノルズの召使がモデルとなったようである。イギリスでは、1772年に奴隷制はイギリスの法では認められないとするマンズフィールド判決が下され、1807年になってようやく奴隷貿易は廃止されるのであるが、それまでイギリス本土では大規模に奴隷が労働力として使われることはなかったにせよ、多くの黒人は召使として働いていたのである。

他方、18世紀初期にはイギリスはネイティヴ・アメリカンの奴隷売買も夥しいほど行っていたが、その後新大陸ではイギリス、フランス、ネイティヴ・アメリカン、アメリカ革命軍入り乱れての熾烈な戦いが繰り広げられる。レノルズの『講話集』(第7講話・1776)には、化粧をしたネイティヴ・アメリカンと鬘を被ったイギリス人のいずれかがお互いのいでたちを見て笑ったならそれこそ野蛮というものであるという、文化の平等性を主張した一文があるが、それは10数年前の彼の実体験に基づくものであろう。実際にレノルズは、1762年に和平条約締結のためにイギリスを訪れた3人のチェロキー族の王 Scyacust Ukah(レノルズの聞き違えであって、Skiagusta Ustenacah ーチェロキーの偉大な戦士ーだという)が、手には平和の象徴である長い煙管を持ち、首には平和の勲章と飾り襟をつけている姿を描いている。また、クライブ家を描いた〈家族の肖像〉画ではネイティヴ・アメリカンの召使が描かれている。アメリカが舞台となった有名な絵としては、後にレノルズの後任として王立美術院の学長となったベンジャミン・ウェストの《ウルフ将軍の死》(1771)があり、より詩的な絵として、ジョゼフ・ライト・オヴ・ダービーの《インディアンの寡婦》(1785)があげられる

であろう。ダービー博物館・美術館に、有名な《太陽系儀について講義する哲学者》などと共に展示されているこの絵には、亡き夫の武器の前で嘆く寡婦が描かれているが、遠くの嵐を予感させる崇高な風景には、18世紀後半の異国趣味、崇高な描写、プレ・ロマン主義が色濃く投影されている。しかし、この絵は、1775年に出版されたジェームズ・アデアの『アメリカ・インディアンの歴史』に基づくものであって、イギリスを訪れた生身の非ヨーロッパ人を描いた絵とは言えない。

ヨーロッパとより衝撃的な出会いをした人物としては、南太平洋のタヒチ〔オタヘイテ〕の青年があげられるであろう。18世紀には多くの世界探検が行われたが、キャプテン・クックの2回目の世界一周の際に、一行はタヒチからオ=マイという若者をイギリスに連れ帰った。マイの家の者という意味が間違っオ=マイという名前と受け取られてしまったこの青年については、ヨハン・ゲオルク・フォルスターの『世界周航記』に記されている。彼はイギリスを訪れた最初のタヒチ人として、ジョージ3世にも謁見し、〈高貴な野蛮人〉の典型として時の人となった。この概念は楽園思想やユートピア思想や北米の植民地事情などとも関わっているが、英語の〈高貴な野蛮人(noble savage)〉という用語自体は、ドライデンの『グラナダの征服』(1670)第1部「私は自然が最初に造った人間と同じくらい自由だ。奴隷制という卑劣な法のできる前、高貴な野蛮人が森を野生のままに走り回っていた時のように」の中で使われたものであり、奴隷とされた〈高貴な野蛮人〉ともいべきアフリカの王の孫を主人公にしたアフラ・ベインの『オルノーコ』が出版されたのは、1688年である。

レノルズの描いたオ=マイの肖像画は、〈高貴な野蛮人〉を思わせるタッチで気高く描かれている。クックに同行したホッジズの描いた南海の島の住人の素朴さからは、遠く隔たっている。しかし、オ=マイがイギリス社会でどんなにもはやされて寵児となったとしても、フォルスターの文章にはオ=マイがさほど聡明でなかったことをうかがわせる言葉が綴られている。また、クックは、文明社会に接して墮落している未開社会を垣間見て、未開社会の人たちを自然状態のままにしておいた方が幸せなのではないかと考えていた。事実、オ=マイの生涯を考えると、彼自身も自然状態が文明に汚されるという18世紀のテーマを現実反映しているような気がしてくる。ちなみに、オ=マイはクックの3回目の世界一周の時にタヒチに帰国したが、皮肉なことに帰国後に既にウォリスカブーガンヴィルの船員が島に持ち込んでいた病に罹り、それが原因であったかは定かではないが、その数年後にまだ30才になるかならないかの若さで没したという。

『かにかの本』の扉頁から考えたこと

佐藤茂樹 (関東学院大学教授)

今日『かにかの本』と呼び習わされるクリスティアン・ゴットヒルフ・ザルツマン(1744 - 1811)の逆説的な子育ての指南書は、1780年の初版では別の書名で出版された。*Anweisung zu einer zwar nichtvernunftigen, aber doch modischen Erziehung der Kinder* (Erfurt 1780)が当初のタイトルである。ところが扉に添えられた「かにかの親子」の絵がその内容と相俟って読者の人気を呼び、いつの間にか上記の愛称で呼び習わされることになった。そこで1792年の第三版からは、この愛称の方が正式な書名として記されるようになった。その挿絵は、元を質せばイソップの「蟹とその母」という寓話に遡るといふ。横這いしかしない息子を咎める母蟹の愚を譬えに用いた、「教を垂れるものは、まず自らの行為によってそれを示せ」という意の寓話で、ザルツマンは自著の内容を象徴するものとして、モットーとともにその場面を描いた絵を扉に掲げた。

ここで、ひとつの疑問に突き当たる。イソップの寓話に登場するのは、私たちのよく知る「蟹」の親子で、教えを垂れるのは「母」である。「蟹」の横這いが読者に周知の習性だからこそ、イソップは寓意を託す形象にふさわしいと考えた。これを踏襲したのなら、扉絵の親子は当然「蟹」のはずである。ところが、ザルツマンの扉絵に描かれているのは「ザリガニ」の親子であり、それどころか、その下に掲げたモットーは「*Faciam, mi papule, si te idem gacientem prius videro* (お父さん、まずお父さんがしてみせてくださるなら、わたしもそうします)」とあり、教えを垂れるのは「父」なのである。このふたつの入れ替えから、わたしたちは何を読み取ることができるだろうか。

書名のドイツ語は*Krebsbüchlein*であり、Krebsは「ザリガニ」である。馴染のない事物が旧知の事物と入れ替わることは文化の伝播の常なので、その観点から見れば、この入れ替えはそれほど違和感なく納得することができる。黄道12宮の図像伝統でも、「蟹座」には「蟹」（例えば、ランブール兄弟による「ベリー公のいとも華麗なる時祷書」）と並んで、「蟹」に馴染のないドイツ語文化圏では「ザリガニ」の図像（例えば、アルブレヒト・デューラーの「天球図」）が用いられるからである。「ザリガニ」に入れ替わることで、「横這い」による寓意の明証性こそ薄められはするが、「ザリガニ」にも「後退り」という特徴的な習性があり、それを知る文化圏では、十分に意は尽くされることになる。寓意の明証性の点で「蟹の横歩き」の方に軍配を上げるのは、むしろ自文化中心の視点に囚われた見方と言うべきなのかもしれない。

しかし「母」が「父」と入れ替わった背景は、これほど自然ではなさそうだ。「蟹とその父」という異伝があればともあれ、「母」をたまたま「父」と読み違える可能性は少ないだろう。確信的に置き換えたのではなく、いつの間にかザルツマンの頭の中で「母」が「父」に入れ替わったのだとしたら、なおさらことは重大である。というのも、「蟹」と「ザリガニ」の交代が生活文化の自然な干渉の所産だとしたら、こちらは社会的価値の形成にかかわるディスコースの干渉が予感されるからである。

では、その干渉とはどのようなものだろうか。その答えは、ザルツマンを同時代の児童書と並べてみるときにより鮮明に見えてくるのではなかろうか。クリスティアン・フェリクス・ヴァイセの『児童の友』およびその後の数々の『新児童の友』、ザルツマン同様、デッサウの汎愛学舎に一時身を置いたカンペの『ロビンソン・ジュニア』…こうした一連の書に共通するのは、まず〈家族〉という舞台である。十八世紀の市民社会の形成は、新しい形の家族の成立と軌を一にしていた。その家族の形とは、親と子の二世代の血縁を核とする小家族制である。職場と住居の分離を最大の特徴とし、外部の職場へ出勤して収入をもたらす父と就労から解放されてもっぱら家庭を快適な私的生活の場として整える母という家庭内の役割分化を内容とする家族制度である。この新しい家族の誕生とともに、子どもの教育という課題が、市民社会の将来と密接に結びついた階級的プログラムとして登場する。貴族や職人と比べていわば生得の階級的アイデンティティを持たない市民階級にとって、たゆまぬ教育によって無形の獲得成果を後継世代に引き継ぐことこそ、唯一無二のアイデンティティの支えであったからである。〈家族〉は、まさにそうした使命を展開する物語の舞台として、啓蒙の児童書に共通の枠を与えた。そして、この舞台の中心に位置するのが「父」なのである。子どもたちは折に触れて様々な見聞をし、父を囲んで感じたこと考えたことを語り合い、父に導かれながら後継世代として必要な知見や判断をひとつひとつ身につける。ライナー・ヴァルトはそのような〈父〉の姿と役割を、
1) 知識の仲介者 2) 正しい思考の仲介者 3) 正しい行動の仲介者、として特徴づけている。この父像は、生得のものではなく、先行する社会的制約と戦う中で形成されるものだからこそ、後継世代の規範となる。このように、自己形成が市民階級のエマンツィパツィオンという大枠と同心円的に重なった時代ゆえに、〈父〉像を優先的価値観として受け入れる素地が生じたのである。そして、個人的な父の姿の背後には社会の合意としての〈父〉が控え、内在化した規範=超自我として現実のひとりの父の言動を超えて社会の潜在的な命令規範となって働くことになる。

ザルツマン自身、シュネッペンタールに設立した学校では、自分を〈お父さん〉と呼びかけさせて

いたという。この背景を前にしたとき、「母」を「父」に代えることは、自覚の有無は別としても、いや自覚がなかったらなお一層、「蟹」を「ザリガニ」と代えた場合よりも大きく時代の言説＝啓蒙の綱領の干渉を受けている証しとなるのではなかろうか。その意味で、この入れ替えには、その内容にも増してこの書における啓蒙の刻印を明確に見て取ることができるのではないだろうか。

蛇足ながら、ザリガニの親子の扉絵からは、父に不合理な愚を聞かされる子どもたちの姿よりはむしろ、偉大な存在である父を前にして恭順に未知の世界への心得を聞く子どもたちの姿を受け取る人が多かったのではないかと推測される。親の思い込みや思慮の足りなさが子どもを損なってしまう愚を正す書にもかかわらず、絵に描かれた親と子の関係が正しようもなく悲惨な姿であったなら、この書を歓迎した読者たちもあえて愛着を込めて*Krebsbüchlein*とは呼ばなかったであろうから。



事務局より

日本18世紀学会役員選挙について

当学会では、2年ごとに役員選挙が行われており、2013年はその年に当たります。同封の投票用紙、封筒を使って投票してください。要領は別紙をご参照ください。投票締め切りは2013年3月9日(土)です。なお、役員選挙用の封筒にはほかの書類（業績リスト等）を入れないでください。

日本18世紀学会会員名簿について

2013年は名簿作成の年度に当たります。同封のカードに間違いや変更がないかどうか、ご確認の上、1月31日(木)までに事務局に連絡をお願いします。なお間違いや変更がない場合も、その旨を事務局にご連絡ください。また、生年月日は役員選挙の被選挙権者名簿作成のために必要ですのでご記入ください。（名簿では公表されません。）

事務局の連絡先は以下の通りです。

- E-mail : jsecs@bun.kyoto-u.ac.jp
- 郵便：〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学文学部 増田（仏文）研究室
- Tel. / Fax : 075-753-2766

業績アンケートについて

『年報』に会員の業績を掲載するために、例年この時期にアンケートを行っています。同封の用紙の要領に従って、回答をお願いします。締め切りは2月末です。データの整理のため、早めにお返事いただければ幸いです。（3月刊行分は予定でもかまいません。また、次年度号に掲載していただくこともできます。）

『年報』への論文投稿について

すでにご存じと思いますが、数年前から、大会での発表をもとにした論文以外の論文も投稿できるようになりました。詳しくは『年報』末尾の投稿規程をご覧ください。

国際18世紀学会の名簿について

すでにお知らせしたように、国際18世紀学会のサイトがヴォルテール財団からラヴァル大学に移り、名簿もそのサイト上で公開されています。（<http://www.isecs.org> → ISECS-direct ; フランス語版ではRépertoireという項目です。そこから人名や国名に従って探せます。）

個人情報も公開されているので、訂正の必要がある場合、あるいは個人情報の公開を望まない場合は、ご自分で訂正していただくか、管理責任者 (Pascal Bastien. admin@isecs.org) に連絡してください。

(英語でもフランス語でも通じます。名簿ページ上端のContactボタンからも同じアドレスにつながります。どうしてもわからない場合は事務局にお知らせください。)

国際学会事務局からの希望として、連絡などの便宜を図るため、メールアドレスを持っている会員は自分のメールアドレスを連絡してください。その際、メールアドレスの公開の是非、またメールアドレスを用いて連絡を受けるか否かは、個人の選択にまかされています。

シンポジウム、講演会や出版の告知などのためにも、国際18世紀学会のホームページを活用してください。

※ 新入会員の方については、日本18世紀学会事務局から国際18世紀学会のサイト管理責任者にお名前だけ知らせてあります。そのような事情で、お名前はすでに記載されているはずで、なるべく自分で上記アドレスにアクセスして、公表したいデータを登録してください。詳しくは国際18世紀学会のサイトをご覧ください。（上記サイトの画面上部のISECS-directまたはRépertoireボタンから名簿にアクセスできます。）

※※名簿データ変更の必要がなくても、国際学会のサイトをご覧ください。国際学会に関する情報のほか、シンポジウムなど各種の情報が掲載されています。

投書欄について

この「学会ニュース」に投書をしていただくこともできます。たとえば以下のような内容の投書が可能です。

- ・学会や事務局への意見、提案、希望など。
- ・掲示板：研究会の呼びかけ、行事の広告、情報提供の依頼（たとえば「『〇〇』という本を探しています」など）。会員同士の連絡にご利用ください。

いずれも事務局まで。

なお、以前の「『百科全書』研究会」のように、チラシや案内文書を「学会ニュース」に同封することも可能です。年3回の発行なので緊急の案内には適しませんが、全会員にお届けできます。（経費等の都合上、枚数の少ないものに限りです。）

共通論題のテーマ、および書評対象図書

会員からの提案を随時受け付けています。事務局または担当幹事まで。（ただし、共通論題のテーマ決定に際しては開催校の希望が優先されるので、必ずしもすぐにご提案が実現するとは限りませんが、事務局から開催校や幹事会に伝達します。）

当学会は学際的な学会であるため、会員の研究が広範囲に及び、担当幹事だけでは各分野の重要文献の情報を集めるのが困難です。書評で取り上げるに値すると思われる図書がある場合、事務局までお知らせください。（特にご自分の専門分野が当学会で十分に扱われていないというご不満をお持ちの方は積極的にご推薦ください。）

学会ニュースのエッセー

今のところ、事務局から執筆をお願いしていますが、会員の皆さんからの希望も受け付けています。執筆を希望される方は事務局までお知らせください。（編集の都合上、4月号は2月初めまでに、9

月号は7月半ば頃までに、12月号は10月半ばまでにご希望をお寄せください。)

年会費

日本18世紀学会の年会費は5,000円です。年会費について証明をご希望の方は、『年報』末尾またはホームページの「会則及び役員選出に関する細則」附則の項を印刷してご利用ください。

会費納入のお願い

学会ニュースの発送とあわせて、会費未納の方には、その年数に応じた金額を印字した払い込み用紙を同封させていただいています。学会の活動は皆様の会費によって支えられています。事務局におきましても円滑な学会運営のため身を引き締め変わらず努力する所存ですが、会員の皆様にはどうか苦しい学会の財政事情をご理解いただき会費納入にご協力をお願い致します。

すでにご存じと思いますが、一般の銀行から郵便振替口座への入金もできるようになりました。

なお、口座番号は以下の通りです。

00950-2-178903 名義：日本18世紀学会

寄付のお願い

別紙要領をご覧ください。

新入会員の方へ

毎年6月の幹事会で入会を承認された方はその年度からの会員となります。6月の幹事会以降に入会を申し込まれた方は12月の幹事会で承認され次年度からの会員扱いになりますので、会費の請求はありませんが、他の会員同様に諸種の配布物をお届けいたします。

新会員の勧誘のお願い

ぜひ18世紀研究に関心のある方を本会にご勧誘ください。入会申込用紙は日本18世紀学会ホームページからダウンロードできますので、よろしく願いいたします。

メーリングリスト

日本18世紀学会では学会や研究会のお知らせ、ヴォルテール財団からの連絡などをメールによって会員の方々にお知らせしております。ご希望の方は事務局までご連絡をお願いいたします。なお、現在事務局からメールをお送りしてもお届けできない会員の方がいらっしゃいます。ご希望にもかかわらず、メールをお受け取りになっていない方はお手数ですが、事務局までご連絡をお願いいたします。また、メールアドレスを変更された場合もお知らせください。

幹事会メンバー(50音順)：安西信一、伊東貴之(東アジア交流担当)、王寺賢太(国際幹事)、小田部胤久(国際学会執行委員)、川島慶子、斉藤涉、関谷一彦(年報担当)、武田将明、田邊玲子(年報担当)、寺田元一、長尾伸一(東アジア交流担当)、馬場朗、逸見龍生、堀田誠三、増田真(代表幹事)、

会計監査：玉田敦子 中島ひかる

日本18世紀学会ニュース 第69号 2012年4月発行

発行者 日本18世紀学会 代表者 増田 真

事務局 〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学文学部 増田（仏文）研究室

e-mail: jsecs@bun.kyoto-u.ac.jp

tel. / fax: 075-753-2766

<http://www.gakkai.ac/jsecs/>